専修大学 来年「創立130年」迎える

創立者・理念・現在・未来

日本で初めて経済・法律の専門教育課程を日本語で授ける専門学校として開学した専修学校（専修大学の前身）。その主たる創立者は、相馬永胤、田尻稲次郎、目賀田種太郎、駒井重格の4人。

明治維新後、米国にそれぞれ留学した4人は異国で出会い、法律学徒と経済学徒のふたつの輪が同じ志で結ばれた。新時代を担う人材を育成し母国の発展に寄与しようとするもので、帰国後の明治13年（1880）に専修学校を創立。創立者たちは、それぞれの分野で目覚ましい活躍を遂げる一方、専修学校の教壇に立ち教育に尽力した。

その活躍や実践的体験が専修学校の授業に活気を与え、社会的地位を高めた。4人の足跡をたどってみよう。（参考文献『専修大学百年史』）

創立者プロフィール

相馬永胤

初代の校長・学長 横浜正銀の頭取も

彦根藩の家に生まれた相馬永胤（1850～1924）は、動乱のなかで初志を貫いた不屈の行動家だ。

明治3年（1870）、新政府の命による彦根藩からの欧米視察員に選抜され、米国に旅立つ。その後、思わぬ帰国から再渡米。失明寸前の病にかかるなど異国での困難や危機を乗り越え、コロンビア大学ロースクールを卒業。さらにエール大学大学院で経済学を修めた。

帰国後、司法省附属代言人（弁護士）に。田尻、目賀田、駒井らと共に専修学校創立に情熱を傾け、米国留学時の仲間らの協力を得て念願の専修学校を設立。法律科で教え、「売買法」「海上法」「保険法」「米国訴訟法」などを担当した。

学外においては横浜始審裁判所判事などを務め、横浜正金銀行（のちの東京銀行、現・三菱東京UFJ銀行）官選取締役となる。同銀行の立て直しと業務拡張に努め、外国公債募集では異例の成果を上げる。ロンドン支店の開設に尽力し、国内外において活躍。同銀行の頭取を務める。23年（1890）、第1回衆議院議員選挙に当選。

この間も専修学校で教壇に立ち、高等商業学校（現・一橋大学）でも法律を講義した。専修学校では校長を務め、大正2年（1913）「私立専修大学」改称と同時に学長に就任。大学令公布により大学に認可された11年（1922）、文部省は学制頒布50年記念祝典に際し、相馬と田尻を教育功労者として表彰した。

12年の関東大震災では、自宅に仮事務所を設けて復興事業を指揮。授業が再開された矢先の13年1月26日に死去。

著書には『英米売買法』『米国訴訟法』などがある。

▲ 相馬も愛用したヘボンの字書『和英語林集成』（慶応3年）

▲ 外国人教師による英語の授業風景（明治末期）

田尻稲次郎

東京市長在職で講義 財政学の第一人者

財政学の権威として明治から大正にかけて活躍した経済学者の田尻稲次郎（1850～1923）は、専修大学での教育に最後まで力を尽くした。

薩摩藩京都上屋敷に藩士の三男として生まれ、洋学を学び、長崎に遊学した後、上京。慶応義塾、開成所、海軍兵学寮、大学南校に学んだ後、刑部省から留学を命ぜられ、明治4年（1871）、アメリカに渡った。エール大学で経済学、財政学を学び学位を得て同大学大学院に学んだ。

帰国の翌年、専修学校を創立すると、田尻は駒井と共に経済科で教授。「貨幣論」「銀行史」「租税論」「国債論」などを担当した。文部省御用掛を命ぜられ、東京大学でも理財学を講義した。明治17年（1884）に大蔵省入りをしてからは財政学の知識を高く買われた。後に帝国大学法科大学教授を兼任。日本初の法学博士の学位を得る。

大蔵省銀行局長を経て、主税局長、貴族院議員、大蔵次官、大蔵総務長官を経て会計検査院長、帝国学士院会員。40年には子爵となる。

大蔵省時代は、日露戦争時に戦費調達、債務処理で功績をあげた。大正7年（1918）、会計検査院長を退くと東京市長に就任。専修大学の学監、幹事を務めた。相馬と共に文部大臣表彰を受けている。経済科の教科書に用いた田尻の訳書には英・マクラウドの『銀行史』、同・ゼボンの『貨幣論』、仏・ボリューの『財政論』などがあり、当代随一の訳書と評された。

専修大学では多くの子弟に慕われ、東京市長在職時には日曜日にも講義（補講）を持った。生徒に教える労を惜しまぬ姿勢は、いつまでも衰えることはなかった。

▲ 大正6年頃の私立専修大学正門

◀ 相馬らによって編纂された『法律語彙』第1巻（明治11年）と田尻らが編纂を試みた『法詞訳集』（明治12―13年）

目賀田種太郎

卒業生の演説指導 音楽教育にも貢献

目賀田種太郎（1853～1926）は、幕臣の家に生まれ、幼少から漢学を学び、英語、数学を修めた。英才の誉れ高く、大学南校に入学。新政府により米国留学生に選ばれ、明治3年（1870）、17歳で米国に渡る。ハーバード大学ロースクールで一般法学の大意、国法学を学び、国際公法の研究に意欲を燃やした。

同校を卒業し学位を得て帰国。8年（1875）には留学生監督を命ぜられ、生徒14人を引き連れて再渡米。自らは法律の研究を深めた。

再帰国後、司法省附属代言人となるかたわら、専修学校設立の準備にあたった。

専修学校を創立後、目賀田が相馬と共に始めた日本語による法律講義は注目を浴びた。担当は「訴訟演習」「私訴犯法」「弁論科」などで、自ら編纂した『私訴犯法』『羅馬法典』を教科書に用いた。

卒業式では米国の慣行にならい卒業生が演説を行ったが、その指導に熱心だったのが名演説家の目賀田だ。

16年（1883）大蔵省に入り、主税局長などを務めた。日清戦争の後、戦後財政の一策として葉煙草専売法公布の〝主役〟を務め、煙草専売事業の基礎を築いた。専修学校にも煙草専売事務員養成所が併設されるようになる。

37年（1904）、「日韓議定書」が締結された韓国へ財政顧問として赴任。男爵、貴族院議員、枢密顧問官となった。

再渡米中に井沢修二（東京音楽学校初代校長）と出会い、日本の音楽唱歌を欧米の音楽と同化させようと共に研究し、日本での音楽教育の発展にも貢献した。

駒井重格

英・仏経済書を翻訳 高等商業の名校長

英語・仏語に熟達し数々の翻訳書を持つ駒井重格（1853～1901）は、専修学校、高等商業学校（現・一橋大学）などで次代を担う若者の教育に尽力した。

桑名藩士の家に生まれ、戊辰戦争では桑名の藩兵隊に属し、藩主・松平定敬に従って各地を転戦、藩内に広く認められた。明治7年（1874）、定敬の弟・定教の米国留学に随行。渡航を前に米国人教師から英語を学び、米国ではラトガース大学で経済学を学んだ。

滞米4年の留学期間中に、同じ経済学を学んだ田尻稲次郎や相馬永胤、目賀田種太郎らと知り合い、友情を深めた。

12年（1879）、田尻とともに帰国。専修学校を開学すると経済科で教え、「外国為換」「予算論」「経済考徴」などを担当した。

米国生活で英語のほか仏語も学び、駒井の翻訳した教科書に英・フォーセット『自由保護貿易論』、同・グーシェン『外国為換論』、仏・ボリュー『歳計予算論』、英・ケアンズ『経済要論』などがあり、いずれも高く評価された。ボリュー『財政論』について田尻の2本の翻訳書は駒井・閲となっている。

第1回卒業式では、幹事として卒業生11人に卒業証書を手渡した。東京大学予備門嘱託として経済学を講義した記録もある。

明治14年（1881）大蔵省入りしたが、まもなく岡山県中学校および師範学校の教師兼校長に転じた。その後大蔵省に戻り、国債局長兼大蔵参事官に昇進。32年（1899）、高等商業学校の校長を兼任。教育者としての業績をあげ名校長と慕われた。同校長の要職のまま死去。48歳の若さだった。